高開集落に見られる山間地域の保全と景観的価値の可能性

金子　玲大　※
Reo KANEKO

本研究は山間地域において集落外部の人々との交流を生み出すなど先進的な取り組みが行われている徳島県吉野川市美郷字大神の高開集落を対象とし、高開集落の特異性を、大神集落全体の土地利用の変化と現状及び石積みの保全状況から具体的に明らかにし、またその要因を考察することを目的とする。その結果、高開集落の景観は集落外の技術を取り入れた高開文雄氏の努力によって維持されていることが明らかとなった。そしてその効果の可能性を 7 種に大別して具体的に示した。

Keywords：山間地域、石積み、高開集落

1.　はじめに

山間地域における自然の生産力を生活基盤として形成される山間地域の景観は、人と自然が相互に影響し合っている。このような景観は手作業が中心の農作や農地の手入れなど地域の住民による日々の生活や知恵に支えられる側面が大きい。しかし、主に高度経済成長期以降、産業構造が変化したことや、住民が高齢化し、地域の担い手が減少していることなど、地域を取り巻く環境の変化を受けて山間地域の景観は変容してきた。このような状況において山間地域の景観の保全を考える際には過去のある時点の景観を凍結的に保存するのではなく、動態的な保全に取り組むことが重要であると考えられる。

図 -1　大神集落内にある高開の石積み

本研究の対象地である石積みで成り立つ高開集落はそのような点において先進的な取り組みが行われている。2000 年前後から地域のまちづくり活動が展開し、集落外部の人と活発に交流するなど、高開集落の場に新たな価値を生み出すことで集落が将来的に存続するための新しい意義が生まれている。

このように時代の変化に応じて新しい意義を生み出した空間とそれを支える技術の実態を明らかにすることは肝要であると考えられる。

そこで、本研究では山間地域の景観保全において注目すべき取り組みが行われている徳島県吉野川市美郷字大神の高開集落を対象とし、文献調査、ヒアリング調査ならびに現地の実測調査から、空間構造と人との活動の面についてその特異性を明らかにし、集落の景観維持に資する要因を考察することを目的とする。

2.　研究の概要

2.1　既往研究

高開の石積みに関する研究は、高開を対象とした三宅らの研究 [1)2)3)] がある。この論文では石積み保全のための活動記録、石積みの修復箇所や担い手の変遷について言及しており、本研究の石積み修復の活動記録はこれに拠る所が大きい。

2.2　研究の流れ

はじめに大神集落全体の土地利用の変化を航空写真から読み取り、耕作地の樹林化の実態を把握し、要因を考察する。次に高開集落における空間的な特徴をヒアリング及び現地調査から記述する。最後にその空間的な特徴から成り立つ高開集落の景観の価値の効果を示す。

3.　対象地の概要

3.1　吉野川市美郷地区の概要

大神集落のある美郷地区は徳島県のほぼ中央に位置し、四国山地に囲まれた山村である (図 -2)。

平成 16 年に鴨島町、川島町、山川町及び美郷村が合併して吉野川市となった。美郷地区は総面積 50.47km2、人口は 1249 人 (平成 17 年国勢調査) である。昭和 35 年の人口が 4807 人であったことから過疎化が顕著である [4)]。

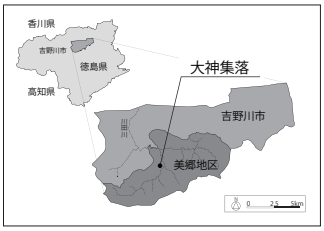

図 -2　大神集落の位置

こうした状況に対応すべく、平成 19 年度から美郷商工会が中心となって「キレイのさと美郷」をコンセプトに掲げ、「地域資源活用による新たな特産品づくりと、人の魅力による『食』と『暮らし』体験観光による地域経済の活性化」を基本方針とし

※　早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建設工学専攻 景観・デザイン研究室 修士課程２年

た様々な取り組みが展開されている。具体的には美郷地区の食材を使った料理の開発、販売ルートの新規開拓、蕎麦作りなどの体験メニューの作成やこれらに伴う旅行の商品化やパンフレットの作成による情報発信などである [5)]。

その一環として、高開集落では石積みのライトアップなどのイベント企画や広報などが行われている。

3.2　大神集落の概要

本研究で対象とする字大神は美郷地区内に位置する。字大神は北部の尾根筋と川田川及びその支流に囲まれた範囲であり、高開、大神、中屋の三つの集落から構成される

図 -3　大神集落の航空写真 (筆者加筆)

(図 -3)。現在、総戸数は 15 戸である。

4.　現地調査の概要

3 回の現地調査の概要を表 -1 に示す。

5.　大神集落の実態

5.1　航空写真を用いた土地利用の変化の判読

2 枚の航空写真を元にして耕作状況を比較することで大神集落の土地利用の変化の実態を明らかにする。使用した航空写真は、大神集落が撮影されている航空写真の内、現在、入手可能な範囲で最も古い 1961 年の航空写真と最も新しい 2009 年の航空写真の二枚である [6)]。航空写真のみでは平地の境界を判別できない箇所があり、そのような箇所は現地踏査によって境界を明らかにした。1961 年の航空写真は樹木が少なく、境界が判別しやすいために航空写真から境界を描画し、その上で不明な箇所は 2009 年の航空写真から遡ることで描画した。航空写真の歪みを地図に重ねられるように補正するオルソ化を行っておらず、実際の面積とのズレが大きいと判断したため面積は測定せず、耕作地の位置と枚数で判読した。

a)1961 年

耕作されている平地の枚数は 410 枚である。蚕や煙草などの商用作物が主な収入源であり、それらを耕作することで生活が成り立っていた時期である。そのために耕作面積を最大限に活用している様子が見られる (図 -4)。

樹林地の需要は、1945 年から 1955 年にかけて戦後復

表 -1　現地調査の概要

第一回調査					
日時	2012.2/11-14				
調査対象地	徳島県吉野川市美郷字大神高開集落				
ヒアリング対象者	高開文雄氏、高開峰子氏				
調査内容	位置の確認	石積みの位置、スロープの位置や平地の境界など基礎的な位置情報を確認した。			
	測量	トータルステーションを用いた平地の三角測量及び巻尺等を用いた道幅の測量した。			
	ヒアリング	平地の名称、道の歴史、石積みの方法、石積みの歴史などについてヒアリングした。			
第二回調査					
日時	2012.8/22-27				
調査対象地	徳島県吉野川市美郷字大神				
調査内容	石積みの修復について	石積みワークショップ [7)] に参加し、石積みの修復の方法を学んだ。また、修復箇所とその時期についてヒアリングした。			
	ヒアリング	[耕作物の変遷及び公道整備のプロセスと影響について] 1, 現在どこに何を耕作しているか 2, 過去のいつ頃に何を耕作していたか 3, 耕作物をを変えた理由は何か 1', いつ公道が整備されたか 2', 公道のためにどこの土地を提供したのか。どのようにして決めたのか 3', 公道の整備による石積みの影響			
ヒアリング対象者	対象者	日時	年齢	居住歴	性別
	高開竹子	8/25(土)14:30-15:30(60 分)	82 歳	62 年	女
	高開トクエ	8/25(土)14:00-14:20(20 分)	92 歳	不明	女
	高開文雄	8/23(木)13:00-14:30(90 分)	78 歳	78 年	男
	高開峯子		74 歳	56 年	女
	藤坂セツ子	8/24(金)13:00-13:40(40 分)	82 歳	59 年	女
	明石定好	8/24(金)14:00-15:00(60 分)	84 歳	84 年	男
	明石重子		79 歳	不明	女
第三回調査					
日時	2012.11/26-28				
調査対象地	徳島県吉野川市美郷字大神				
調査内容	石積みの状態	①草の生え具合、②孕み具合の観点から石積みの保全状態を現地調査した。			
	耕作物	現在の耕作物を調査した。			

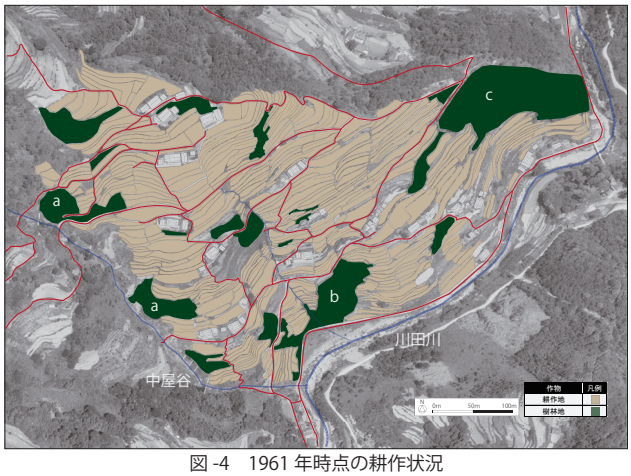

図 -4　1961 年時点の耕作状況

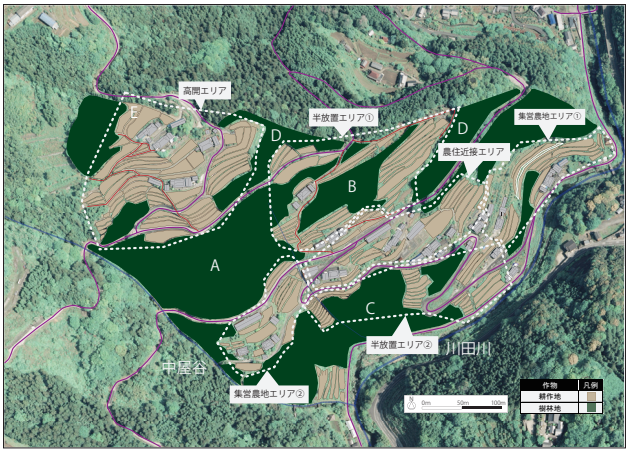

図 -5　2009 年時点の耕作状況

興の材木の特需に伴って高かったが、それ以降は停滞していった[7]。そのため、1961 年においては樹林地を積極的に広げることがなかったと考えられる。

b)2009 年

耕作されている平地の枚数は 205 枚である。人口が減り、集落の住民が高齢化したことによって耕作地の維持が困難になり、耕作されない平地の大半が杉やヒノキを植えるなどして意図的に樹林化されたと推測される。また、住民が集落外に移住したために広範囲に樹林化した地区が見られる (図 -5)。

5.2　樹林地化の要因の考察

ヒアリングより､樹林地化した３つの要因が推測される。

[A] 所有者移転

1970 年から 1980 年に A 内の土地の所有者が大神集落外に移住した際に杉を植林し耕作地が樹林地となった。

[B][C] 移住

1958 年に B の東に隣接する住民が大神集落外へ移住し、荒れ地化した。C は西に隣接する住民が同じく大神集落外に移転した際に杉を植林したことで耕作地が樹林化したと推測される。

[D] 耕作困難

住民が高齢化し、農業を維持することが困難になったために土地の所有者の家から遠い耕作地が樹林地した。

また、E の高開地区において樹林地化が比較的進行していない一因として、比較的手入れがかからない梅、茶を植えていることや、耕作できない土地に植林するのではなく、観賞用花木を植えるなどの取り組みが挙げられる。住民間で耕作しない平地に対して観賞用花木を植えることを条件に耕作しない土地を貸す事例がある[注 1)]。

5.3　石積みの保全実態

大神集落における石積みの保全実態を調査するために、草の生え具合と孕み具合の項目を設け、それぞれ三段階で評価した (表 -2)。

表 -2　評価項目

高さ	巻尺を用いて 10cm 単位で測量		
崩れ箇所	あれば位置を記録し、撮影		
草の生え具合	1. なし	2. 少し隠れている	3. ほとんど隠れている
孕み具合	1. 緩みなし	2. 少し緩んでいる	3. かなり緩んでいる

a) 石積みの状態

まず、草の生え具合を見ると高開エリアで「なし」の項目の割合が突出して高い (図 -6)。これは高開集落の住民が日常的に除草をしているからである。この動機として多くの観光客が訪れるようになったことが挙げられる。また、半放置地区の「ほとんど隠れている」の項目の割合が高く、周囲が樹林であると石積みに草が繁茂しやすいことが考えられる。

孕み具合を見ると、高開以外の地区では大半の石積みが緩んでいる (図 -6)。高開文雄氏ヒアリングから、現在の住民の世代は家の裏の石積みが崩れるなど致命的なことがない限り、石積みの修復をすることはほとんどないことが明らかになった。

高開地区においては、優れた石積みの技術を有する高開文雄氏が、土木作業員の仕事を引退した 2000 年頃から約 100 箇所の石積みの修復を手がけているために崩れる危険性が高い石積みが少ない。

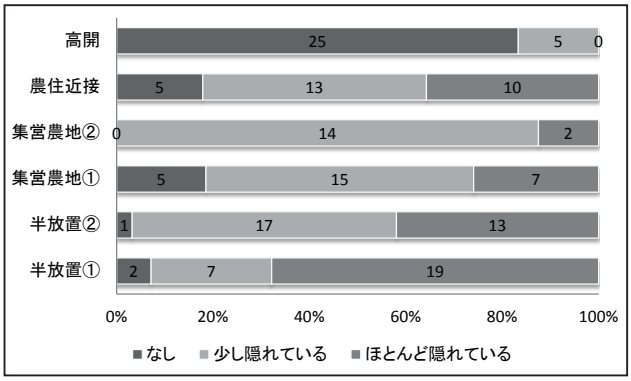

図 -6　地区毎の草の生え具合の割合

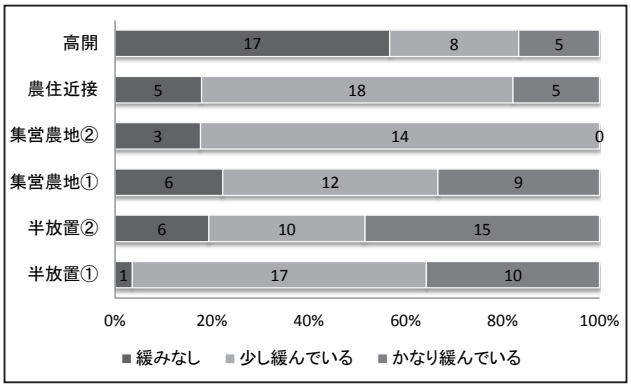

図 -7　地区毎の孕み具合の割合

b) 石の積み方の違い

それぞれの地区における石の積み方の外見上の違いを見ていく。大神地区では石の積み方がおおよそ三種に分類できる。高開エリアに多く見られる a は矢の羽積みと呼ばれる積み方である。集営農地エリア②に多く見られる b は平な石を用いた乱積みである。これは青石と呼ばれる平な石が析出する割合が他地区より多いためである。c は石の種類、積み方の特徴を記述できない b 以外の乱積みである。

図 -8　石積みの外観 (左から a,b,c)

5.4　小結

土地利用の変化から、高開エリアでは耕作地が大神集落内において比較的維持されているということを示し、その一因を考察した。また、石積みが他の地区に比べ、健全に保全されていることを示した。そしてその要因として 2000 年頃からの高開文雄氏個人の取り組みが大きく影響していることを明らかにした。これらより、高開エリアが他エリアに比べて山間地域の景観が保全されている場所であることが言える。

6.　高開集落に関する調査結果

高開集落における空間的な特徴を石積み、平地、スロープ、道の 4 つの観点から考察していく。

6.1　石積みについて

a) 歴史

高開の石積みが築かれた年代は明らかではないが、高開文雄氏 (昭和 8 年生まれ) の祖父である高開三十郎氏 (明治 10 年生まれ) の年代の男達の石積みの作業がすでに修復中心であったことから、少なくとも明治中期以前に築かれたと考えられる [1)]。また、高開集落には貞治 (1362 ～ 67) の年号がある石碑があり、南北朝時代にかなりの開発がなされていたことが考えられる [8)] ため、石積みもその時代に築かれていた可能性がある。また、石積みの棚田は石を割ることのできるタガネが日本にもたらされた鎌倉初期に当たる 12 世紀以降にできたと推測 [8)] されることからも、南北朝時代に高開集落に石積みが築かれていた可能性が高い。しかしこうした長い歴史の中で具体的に石積みの築造時代を特定することはできていない。

b) 石積みの構造

石積みに用いられている石はミソ石と呼ばれる結晶片岩と、青石と呼ばれる徳島県に多く見られる緑泥片岩が大半を占め、その中でミソ石の割合が高い。それらの石を使い、①表に見える積み石、②積み石を支え、水はけをよくするグリ石、③泥の 3 種から成っている (図 -9)。

いずれの箇所も石の形が整えられておらず、石の目地が直線になっていない乱層乱石 7) に分類される積み方である。その中でも高開の石積みの積み方は二種類に分けられる。石の大きさや形状を選別しない古い積み方と、大きさや形状を選別してある規則に沿って石を積む高開文雄氏の積み方である。

高開文雄氏の積み方は、石を 45 度に傾け、横の石に立てかけることから矢羽積みと呼ばれ、また、奥行きのある石を積むために小口積みと呼ばれる。古い石積みの多くのほとんどは石の奥行きが短く、隣り合う石との噛み合いが悪いため不安定であるが、これは三宅らが言うように 3)、畑地造成地に石の表面積の大きい面を表にして、石積みを高く築くためにとられたと考えられる。また、石を精緻に整形する道具が無かったからとも考えられる。

また勾配に関しても石積みはてり勾配と緩やかな勾配の石積みの 2 種類に分けることができる (図 -10)。てり勾配と呼ばれる断面形状が反っている石積みは土圧によって中腹部がはらむのを防ぐため、また、上部の畑の面積をできるだけ大きくするためにこのような形状になっていると考えられる。

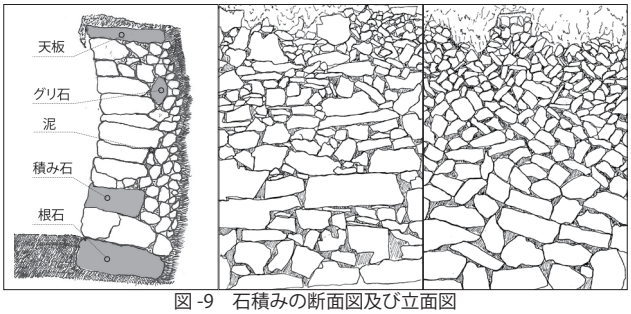

図 -9　石積みの断面図及び立面図

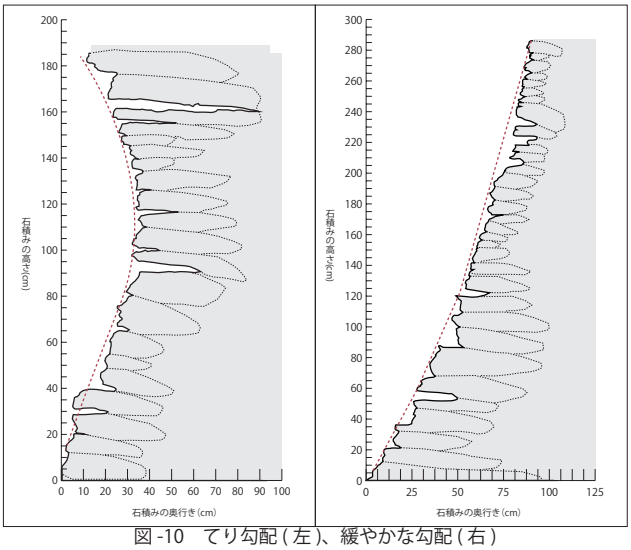

図 -10　てり勾配 (左)、緩やかな勾配 (右)

c) 石積み技術の由来

高開文雄氏が修復した石積みは小口積み、矢羽積み等のある程度記述できる特徴があり、高開集落外部から個人的に習得した二つの技術が由来であると推測される。一つは高開文雄氏が土木作業員として石積みやコンクリートブロックを積む際に習得した技術であり、もう一つは徳島県内の石積みを生業とする職人から教わった技術である。

高開氏は 18 歳～ 60 歳前後まで、農閑期の冬に土木作業員として徳島県各地のので主に石の擁壁の工事に携わっていた [注 2)]。擁壁の大半はコンクリートを使用しない空積

みであり、ある程度体系化された石積みの技術を習得するきっかけの一つとなった。擁壁の石材は主に整形された間知石であり、矢の羽積みが多かったという。この技術から不整形な石を用いた矢の羽積みという積み方が生まれたのではないかと推測される。また、高開氏は工事の際に、数人の石積みを生業とする職人から石積みの技術を個人的に学んだ[注 3)]。

d) 石積みの修復のプロセス

筆者が参加した「高開の石積みワークショップ[9)]」の体験から石積みの修復のプロセスを述べる。修復のプロセスは表 -3 のように 8 つに分けられる。

表 -3　石積みのプロセス

作業	作業内容
準備	まず始めに修復をする前に作業がしやすいように準備をする。石積みの下の平地の幅が狭く、石積みが高い今回の修復箇所においては、1) 石積みの隙間にテジョウセンを打ち、その上にアユミを載せ、足場を作る、2) 崩した石が下の平地に転がり落ちないように同じくアユミで仕切りを作る、3) 雨天に備え、ビニールシートの屋根を設営した。
崩し	次に修復する箇所の石を手で崩していく。石を積み直す際は基本的に崩した石をもう一度使うため、後に石を積みやすいように土、グリ石、積み石、など大きさ毎に分別して平地に置く。また、崩しすぎると別の箇所から補充するグリ石が増えるために崩しすぎないように注意する。石積みの上の方にある石は上の平地に置く。
床堀	全ての石を崩した後、石を積む準備をする。根石を置くために両刃ツルを用いて地面を深さ 20cm、幅 50cm 程掘る。昔は石積みの土台である根石が沈まないように、根石の下に赤松の丸太を埋めることもあった。
根石入れ	床堀りした場所に、ジョウセンなどを用いて根石と呼ばれる石積みの基礎になる石を置く。根石を置く際には奥の部分が下がるように置く。
積み	根石を置いた後、大きな石から順に積んでいく。石を揃えるために両側の古い石積みに面を合わせる。積み石は奥が下がるように積む。表面の積み石を積みながら、隙間ができないように玄翁で叩きながら奥にグリ石を詰める。積み石が固定できない形の場合、石の形を玄翁で整える。石積みの勾配は約 2 分～ 3 分。(73 度～ 79 度)
糸張り	石を積んでいる間、適宜糸を張り、横の石積みとの位置を確認する。石を揃える際には面 (外から見えている石の面) が最も出っ張っている部分を基準に揃えると合わせやすい。
天端置き	石を積み終えたら、石積みの高さを揃え、一番上に天端を置く。天端は平たい石である必要があるため、天端石の下の石の高さを揃える。また、天端石は古い石積みに十分な量がないために日頃から集めておくと手間を省くことができる。
土被せ	天端を積み終えたらその上に土を被せ芝桜を植える。芝桜は平地の土砂の流出を防ぐ役割を果たす。

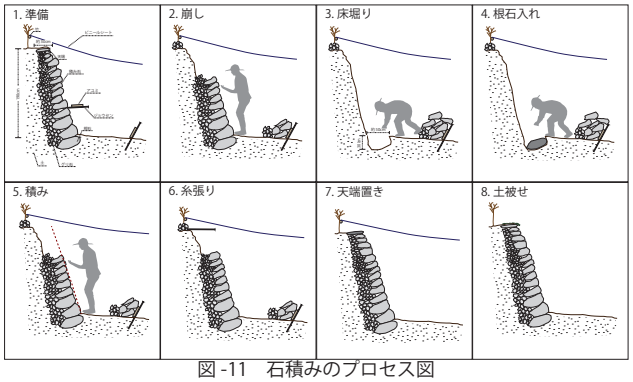

図 -11　石積みのプロセス図

図 -12　修復による石積みの変化

6.2　平地の実態

高開集落のような急傾斜地で耕作するためには雨水の排水路を作り、それに伴う土砂の流出を防ぐなど、耕作地としての機能性を保つための工夫が施されていると考えられる。そこで、そのようなデザイン上の特性を明らかにするために一枚の平地に対してトータルステーション、尺棒と巻尺を用いて測量し、平面図と断面図を作図した (図 -13,14)。

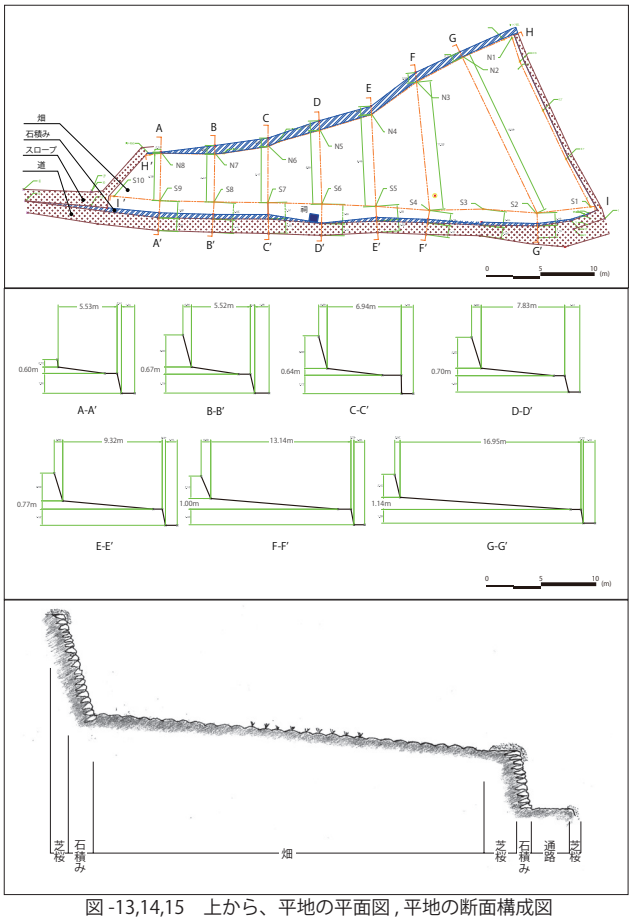

図 -13,14,15　上から、平地の平面図 , 平地の断面構成図

測量の結果、平地は雨水が溜まらないように全体が緩やかな傾斜地となっており、その垂直方向の勾配は7～8.3%でほぼ一定である。目立った排水路は無く、この理由は、土の透水性が高いためであると考えられる。平地の下端には芝桜が植えられており、これは美観上の理由だけでなく、表土の流出を防ぐという機能的な役割を果たすためである[注5)]。

6.3　道の実態と変遷

高開の集落には、市道が整備される前に集落の住民で建設したアカミチと呼ばれる生活道路と、約 20 年前に整備された市道がある。

アカミチは、高開の集落の住民が移動するために主に使われていたが、その他にも、農業のための牛馬の移動の道としても使われた。また、他の住民が山を越えて移動する道としても使われていた。道幅は 600mm ～ 1800mm とバリエーションに富むが、主に集落間の移動に使われていたアカミチは道幅が広い (図 -15,16)。

市道は、20 年ほど前に住民が土地を提供し合って整備された。その大半はアカミチを元にして拡幅され、全体的には勾配が緩やかになるような経路が選択されているが、急勾配になっている箇所もある。また、大型の車両の通行が可能な市道が整備されたことによって使われなくなったアカミチが生じ生活道路の使い方が大きく変化した。

図 -16　公道 (左)、アカミチ (右)

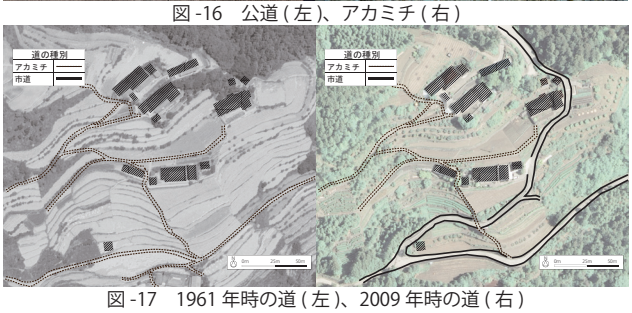

図 -17　1961 年時の道 (左)、2009 年時の道 (右)

6.4　スロープの実態と新設

スロープとは上下の平地間、平地と道間を移動するための斜路である。対象地区に 32 箇所あり (図 -17)、3 種に分けることができた。

①平地と平地を繋ぐスロープ (22 箇所)
②平地とアカミチを繋ぐスロープ (8 箇所)
③平地と市道を繋ぐスロープ (2 箇所)

①の平地と平地を繋ぐスロープが最も多く、この特徴としては平地の中央部付近に設置されていることが挙げられる。これらのほとんどは高開文雄氏が移動しやすいように新たに作ったものが多い。以前にこのようなスロープがなかった理由は、スロープを作ることによって耕作地の面積が減るのでこれを避けるためだったと考えられる。②の平地とアカミチを繋ぐスロープは、昔から存在し、平地に移動する際に不可欠なものであった。このようなスロープは幅の狭いアカミチで牛馬を反転させる際にも使われた。③の平地と市道を繋ぐスロープは、市道が整備された際に同じ素材のコンクリートで固められ、階段状に変形している。また、スロープに似た構造物として、足場となるように石を階段状に設置しているものも見られた。

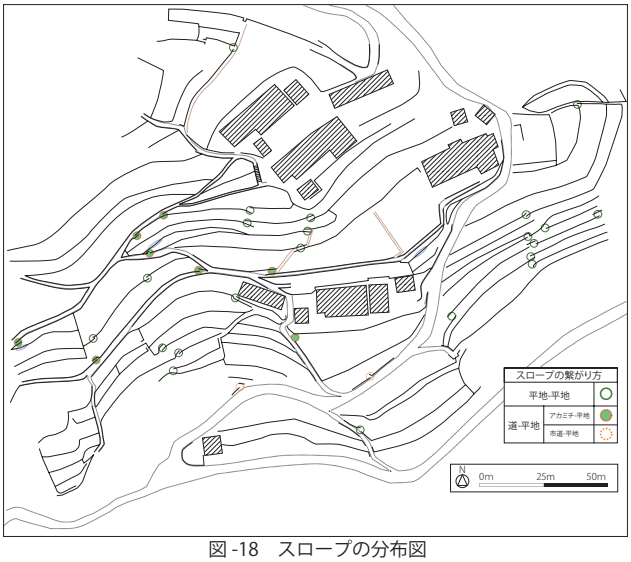

図 -18　スロープの分布図

6.5　家及び平地の名称と所有形態

高開では家と平地に対して住民独自の名称が付けられていることがヒアリングから明らかになった。まず、家の名称についてである。集落に家は 4 軒あり、全ての姓が高開であるため、それぞれ「空」、「上」、「下」、「尾」と呼ばれている。主に家の高さの位置関係を示し、最も高い場所に位置する家は「空」、尾根筋に近い家は「尾」と呼ばれている。高開集落の耕作地は、個々の区画の面積が小さく、形や位置関係が複雑である。それを識別するために住民が独自に耕作地に名を付けている。対象地にある畑の名称は 15 種類あり、以下の単語の組み合わせから成り立っている (図 -18, 表 -4)。

①地形の特性を表す表現 ex)「窪」「丘」
②自分の家に対しての相対的な方向を示す表現 ex)「前」「先」「上」「下」「裏」
③絶対的な方角を示す表現　ex)「東」
④過去の土地利用を示す表現　ex)「田」「野壷」
⑤近くの特徴的な場所を示す表現　ex)「滝」
⑥所有者を示す表現　ex)「ちょうしろう」「長白」

以上のような単語の組み合わせに基づいた呼称を用いることで、区分された土地を正確に言い表すことができていると考えられる。

次に平地の所有形態を見ると、基本的に家の周辺の平地はその家が所有しているが、離れた場所に所有されている

土地もあり、複雑に入り組んでいる (図 -18)。

このような飛び地は分家した際に土地を分配したことによって生じたと考えられる。

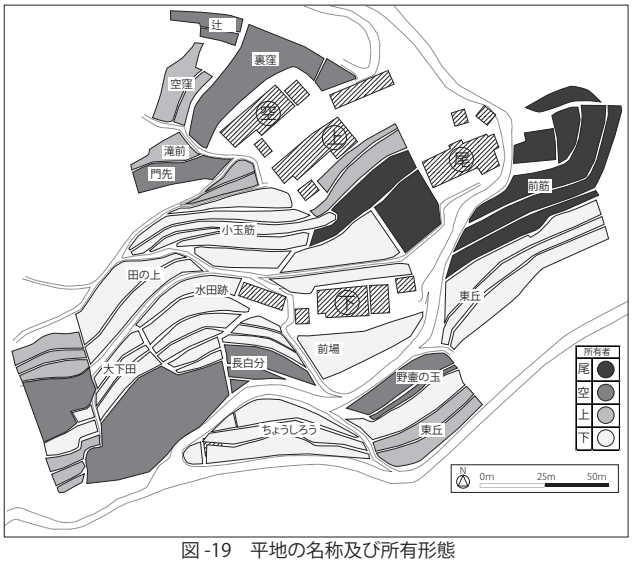

図 -19　平地の名称及び所有形態

表 -4　平地の呼び名と由来

語源の分類		呼び名	由来
地形	窪	裏窪	「裏」は家の裏であり、「窪」は傾斜が緩い場所である
	丘	東丘	「下」の家の東にあり、尾根に近い場所である
方角	前	前場	「下」の縁側の前である
	先	門先	「空」の家の玄関の前の場所である
	上、下、裏、東	田の上など	耕作地を所有する家に対しての方角である
過去の土地利用	田	田の上 水田跡 大下田	水田があった平地の上にある 水田があった場所である 水田があった場所の下にある
	野壷	野壷のだま	野壷 (肥え溜) があった平地である
近くの場所	滝	滝前	「滝」と呼ばれる岩盤 (大きな石) の前の場所である
敷地面積	小	小だま筋	小さな細長い形の段畑が集まっている場所である
地主	ちょうしろう	ちょうしろう	ちょうしろうという屋号が所有していた場所である
	長白	長白分	ちょうしろうという屋号が所有していた場所である

6.6　小結

石積みの調査から、高開文雄氏による石積みの修復技術がある程度記述できる体系化された技術であることと、その技術が集落外部から導入されたことが明らかとなった。また、機能性を見込んで芝桜を植えたことが芝桜イベント開催のきっかけとなったことなど、個人的な仕事がイベント開催等のまちづくり活動の動因となっていることが伺える。

7.　高開集落の景観の価値

高開集落の景観が有している価値について考える。高開集落の景観の変化は直接的には高開文雄氏の意図的な働きかけによって引き起こされた[注 5)]。この変化によって、観光客が惹きつけられ、集落外部との交流が生まれ、実質的な石積みの保全活動に関わるイベントが開催されるなどの新たな価値が高開集落に生まれたと考えられる。それが波及的に山間地域の人の生活に変化をもたらした。つまり、自然の資源を生産基盤としていたために必然的に成り立っていた集落の景観から、その地の生活者とともに存続しているいわば「生きた」状態で存在する意義が高開集落に生まれたと言える。以下にその意義を見出すきっかけになると考えられる景観的な価値の 7 種の効果を具体的に示す。

①交流の誘発

集落外の小学生や観光客が、高開集落と関わるきっかけを作る場所である。

②移動の快適性

集落内の回遊性を高める工夫である。

③佇む場所

休むことができる場所である。

④機能保持

雨水によって石積みが崩れることや平地の土砂が流出することを防ぐために施された工夫である。

⑤手入れの痕跡

人の生活を想起させる手入れの様子である。

⑥視点場

多くの人の印象に残り、共有化され得る対象を眺められる場所である。

⑦アイストップの花木

曲がり角や人が多く通る道沿いで移動の際に印象に残りやすい工夫である。

表 -5 ①　高開集落の景観の効果の可能性とその誘因

誘因		効果	写真
①交流の誘発	体験学習の場	近隣の小学校の授業の一環で、蕎麦や麦を育てる体験学習の場として活用される	
	イベントスペース	芝桜祭りや石積みライトアップイベント等のイベント開催のきっかけとなり得るシンボル的なポテンシャルを有する	
②移動の快適性	スロープ	集落全体を移動する際のネットワークを形成する	
	圧迫感の軽減	石積みを積み直す際に石積みの勾配が緩くなり、細いアカミチを歩く際に感じられる圧迫感が軽減される	

表 -5 ②　高開集落の景観の効果の可能性とその誘因

③佇む場所	木陰	見晴らしが良く、そこにある段差が椅子の役割を果たす	
	腰掛台	眺めのよい場所に置かれた大きな石が椅子の役割を果たす	
④機能保持	周水路	家の前を流れる水を、ビニルのパイプから道路脇の排水路に流すことで石積みが崩れることを防ぐ役割を果たす	
	芝桜	耕作地の土砂が流出することを防ぐ。 また、4 月に咲く花が観光客を惹きつける	
⑤手入れの痕跡	耕作地	耕作されている様子から地域に住む人々が日頃から手入れしている様子を想像することができる	
	手入れされた石積み	石積みの石の隙間に草が生えていないことや、石積みの積み直しをしていることで地域に住む人々が日頃から手入れしている様子を想像することができる	
⑥視点場	一望	高開集落の全貌を一目で把握することができる	
	見晴らし	1, 向かいの別枝山の山脈を広く眺めることができる 2, 向かいの宗田の山脈を広く眺めることができる	
⑦アイストップの花木	サザンカ・しだれ桜	曲がり角や人が多く通る道沿いで移動の際に印象に残りやすい	

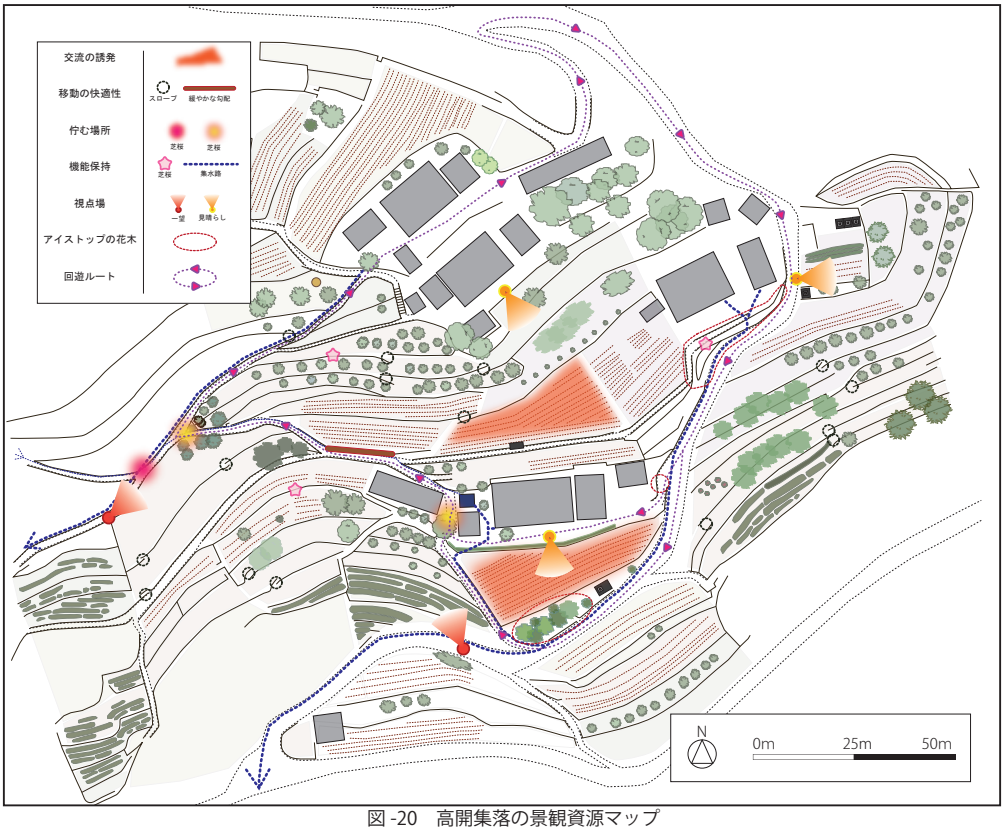

図 -20　高開集落の景観資源マップ

[注記]

注 1) 現地を案内している際に高開文雄氏が土地を貸しているという話を聞いて後に詳細を質問した際の『*(中略) サザンカとか。これも大分なる。桜もあるし。家の近くやからここへ出てきても感じがいいからな。*』という回答から

注 2)18 歳より 28 社以上の建設会社の元で主に石積み擁壁建設の公共工事に関わったという発言から。擁壁の石材は擁壁の工事の監査では石の大きさや、不良な石積みである三段積み、四つ巻等の不良な石積みがないかの厳しいチェックがあったという。

注 3)『(工事の際は) *二人で一組になってかいていく (積む) んよ。ほんで持っていったら持っていった時分に、こう積むんや。ああ積むんや。って盗み見っちゅうて。（中略）プロ (石工) と一緒に積んだこともするから、七、八人は (石工を) 知ってる。*』

注 4) 芝桜をなぜ植え始めたのかという質問に対して、『*花が茂ってきたら土止めになるって考えたらね。傾斜地やから表土が流れる。(表土の流出が) 止めるなら花でも何でもいいんや。ほんで芝桜を見て、止まりそうやから芝桜を植えようかっていう。家内はきれいやからっていう考えで植えたんや。*』という高開文雄氏の回答から

注 5) 高開文雄氏に花木を植え始めた理由を尋ねた際の、『*私は親父と違って日稼ぎに行ったからいろんな話を吸収したんやな。百姓一点張じゃなくて人が来るようにせなんだら将来だめやって考えがあったから。*』という回答から

[参考文献]

1) 三宅正弘 , 庄野武朗 , 山中英生 : 中山間地域における石造社会基盤の景観保全システム - 徳島県・高開 (たかがい) の石積みを事例に -, 土木計画学研究・論文集 Vol.22,2005

2) 三宅正弘 , 藤田愛 , 山中英生 : 土木および土木教育における市民共同型石積みの可能性 , 土木計画学研究論文集 Vol.20,No2,2003.9

3) 庄野武朗 , 三宅正弘 : 風土的景観の継承活動としての市民参加型石積みに関する研究 , 都市計画論文集 No.40-3,2005.10

4) 吉野川市 : 吉野川市美郷区域過疎地域自立促進計画 ,2010.9

5) キレイのさと美郷の blog より : http://ameblo.jp/shokokai-misato/

6) 国土地理院が発行する空中写真《(写真名 MSI611-C18A-40(1961 年撮影) 及び CSI20091-C22-7(2009 年撮影)》を使用した

7) 美郷村史編さん委員会 : 美郷村史，p.491,1969

8) 美郷村史編さん委員会 : 美郷村史，p.17,1969

9) 宮本常一 : 宮本常一著作集 26, 未来社 ,p.343,1981

10)2012 年 8 月 18 日～ 21 日にかけて開催された「高開の石積みワークショップ」に筆者が参加した際に高開文雄氏から石の積み方を教わった。このワークショップは高開の石積みの価値を伝えるために徳島大学の真田純子助教が主催し , 著者を含む学生の 14 名が参加した